

## Interview

### 牧野尚彦会長に聞く

話し手：牧野尚彦先生〔近畿病院図書室協議会会長〕（兵庫県立尼崎病院院長）

聞き手：森川治美氏〔編集部長〕（松阪中央総合病院図書館司書）

前田元也氏（西淀病院図書室司書）

森川：今日は、お忙しい中、お時間をいただきまして本当にありがとうございます。牧野先生には、1996年度から、私どもの近畿病院図書室協議会の会長としてご尽力をいただいています。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

今日は、これからの病院図書室に求められる役割や、そこで働く図書館員についてあらゆる角度からご意見をお伺いできればと思っています。よろしく願いいたします。早速ですが、先生が会長をなさってこられてのご感想、ご意見などがあればお聞かせいただけないでしょうか。

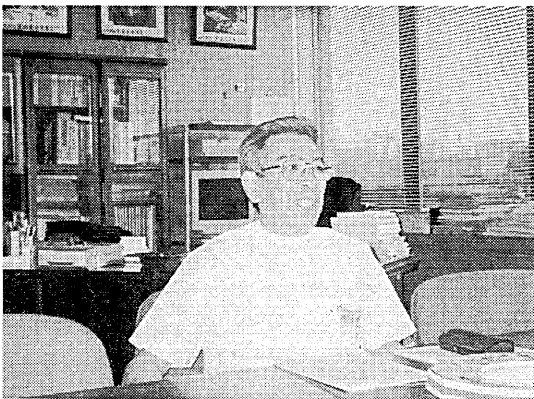
牧野：そうですね。会長をお引き受けして3年目になりますが、まず、率直な印象として、これだけの大きな組織にもかかわらず、活発な活動をされていることに感服しています。と申しますのも、どの団体もそうだと思いますが、主旨が良くても実際の運営となる

となかなか長続きしづらいものなのですが、確実にその活動の輪を広げているという点では、皆さんのかなりのご苦勞があったのだと感じています。

研修会の内容も、実に的を得ているように感じます。また昨年度は「医学雑誌総合目録」を完成されました。編集委員の方を中心に、多くの皆さんが協力をされてのことだとは思いますが、相当な仕事量だとお察しいたします。皆さんの莫大なエネルギーを感じることができました。目録が完成したということで、会員間の相互貸借の件数が増えて、たいへんになってきたという面もあるでしょうが、日々の皆さんのご活躍が、病院の医療水準を根底で支えていただいているという点で、本当に心強く感じています。

前田：会員数も年々増加の傾向にあり、協議会への期待の高まりが感じられます。

牧野：そうですね。協議会の名称が“近畿



会長：牧野尚彦先生



前田、森川氏

病院図書室協議会”ですから、近畿地区だけの会員と思われがちですが、実際には、北から南までの全国的な組織となってきましたね。運営もたいへんでしょうが、頑張っていたきたいと思います。

実は、私、近畿病歴セミナーの副会長をさせていただいたことがあるのですが、診療情報管理士の皆さんも、とても熱心な方が多く、研修会なども活発に開催されています。その点では当協議会とも共通点が多いように感じています。おそらく、図書室も病歴室でも少数職場のところが多いのではないかと思います。同じ病院の中でも、看護婦などの多数の職場は、院内で研修会などを企画して、研究や学習の機会を持てるのですが、図書館の司書の皆さんや、診療情報管理士の方々は、院内で、そのような機会をもつことがむずかしいでしょうから、当協議会などの活動を通して、勉強や研修の機会を持つことが重要になってきていると感じています。

協議会の活動に、会員の図書館員の方が参加することによって交流が深まり、学習することによって、個々の病院の図書館機能が充実し、病院の医療水準の向上につながれば病院にとっても大きなプラスとなります。

### ●病院図書室の機能を充実させるために

森川：ありがとうございます。ところで、私たち図書館員も「病院図書室が果たすべき役割や機能について」、あらゆるところで議論を重ねてきているのですが、ずばりこれからの病院図書室にどのような機能や役割が必要だとお考えですか。またそれに向けてどのような取り組みが必要でしょうか。先生のご意見をお伺いできればと思います。

前田：最近では、臨床研修指定病院でも図書室の位置づけが明記されていますし、病院機能評価でも図書室の項目があるように、少しずつではありますが、その役割が鮮明にされつつあるように感じています。

牧野：これからも、もっとその役割や機能

がきちりと位置づけられて鮮明になっていくことを切望しています。なぜならば、病院の機能水準の向上という点から考えますと、私は次の2つの柱があるのではないかと考えているからです。ひとつは、学会や研究会などへの参加です。もうひとつの柱は、情報のインフラの整備として、図書室や病歴室の機能の充実だと考えています。このことは総論としては、医師をはじめ病院の幹部も理解はしているのだと思いますが、さきほどの臨床研修指定病院の基準でも、現場の要求に応えるにはまだまだ不十分な内容になっていますから、現実の問題として各病院の幹部が、意識的に力を入れて推進しない限り、なかなか前には進みにくいという現実があります。

森川：臨床研修指定病院の基準は、年間の図書予算が最低でも200万円以上となっており、人についても十分な図書、雑誌の活用を図るために専任の職員を置くことが望ましいという内容です。しかし、実際200万円の年間予算では、必要な図書や雑誌を購入するのは不可能です。

牧野：そうですね。予算面でもそうですが、せめて病歴室には、診療情報管理士の方がいること、そして図書室には司書の方がいることと明記していただけるだけでも、大きく改善できると思います。このように制度化することによって、全体の底上げをはかっていくことが必要だと思います。特に、公的病院では、常勤職員となるとローテーションがあり、配置換えは避けられませんから、なおさらだと思います。やはり、こういった制度的誘導は必要でしょうね。

実際に、その必要性を認めて、図書室や病歴室を設置して、病院の規模や医師などの要求に応えるだけの図書予算をつけ、司書を配置している病院は、それなりのレベルを維持し社会的にも信用のある病院がほとんどですから、言うまでもないことでしょう。

今、資格認定についても模索されているとお聞きしていますが、資格が仮にできたとしても、その資格をお持ちの方を配置するとい



う制度がないといけません。そういう意味では、車の両輪のようなものなのかもしれません。

前田：制度化していくということで仮に進めていくにしても、やはり一定の実績が求められるのだと思います。職業人としての倫理や理論、技術を身につけていくための教育システムが確立しているかどうかは、ひとつの判断基準になるのではないのでしょうか。

牧野：そうですね。少なくとも、教育制度が確立され、各病院の図書館員の皆さんが受講されることで、病院図書室全体のレベルアップをはかることができます。そのことで、多くの病院図書館員の方が同じレベルで論議ができるようになりますから、これは次の新しい段階へ進むことに可能性を持つものだと思います。

### ●医学情報の電子化と図書室—利用者へのガイダンスを積極的に

森川：最近では、医学情報の電子化が進み、これまでの紙を中心とした図書館のサービス形態も大きく変化をしてくれています。インターネットをはじめとして、この流れは今後も大きく発展していくことと予想されますが、図書館としてどのように関わっていくことを期待されますか。先生のご意見をお聞かせください。

牧野：そうですね。皆さんにとっては、これまでの知識に加えて、新しい知識と技術の習得が必要でたいへんでしょう。私も含めて、利用者が図書室に求める内容は、資料を整理

し管理してもらうことはもちろんですが、主たる利用はやはり情報の検索でしょう。しかも最新の情報を正確に迅速に提供してもらいたい。その要求に応えようと思えば、電子化された情報を、コーディネートするだけの知識と技術がどうしても求められるのだと思います。

前田：電子情報の利用という点でいえば、利用の仕方は利用者によってまちまちで、インターネットやCD-ROMなどのデータベースを、自由自在に使いこなす方もいれば、そうでない方もいます。そこで、利用者にあわせたサービスの提供が必要ではないかと感じています。

牧野：そうですね。電子情報は今後より便利になっていくと思われませんが、どんな利用者に対しても、私たち利用者よりは常に一歩前にたって、私たちが上手に利用できるように、コーディネートしていただければと願っています。

また、これまで検索は司書の方をお願いをして調べてもらうということが多かったと思いますが、最近では、利用者自身が検索をするといったケースが増えてきているように感じています。当院の図書室でも、医師以外の職員の利用でも、少しずつですがその傾向にあるとのことでした。

しかし実際には、検索方法がよくわからない方も多くいるでしょう。そんな方には、検索の方法を指導していただきたいし、ほしい情報が検索できた方は、入手するために図書室をどんどん利用してほしいと思います。したがって、利用者には、より有効な図書室の利用方法や、電子化された情報が利用できるようにガイダンスしていただければと願っています。

そういう意味では、情報が電子化されたことで、図書室を利用するチャンスが増えてきたのではないかと感じています。

前田：エンドユーザー志向が強まる一方で、私たち図書館員にも文献検索を依頼されてくる件数も増加してきています。インターネッ

トなどの普及で、利用者の情報要求が質量ともに喚起されているのではないかと感じています。

牧野：そういう要求も必然的に出てくるでしょうね。これまでお話ししてきたことは、少し矛盾するのですが、実は医療従事者は、どうしても臨床の現場に出たいという気持ちが強くあります。というわけではないのですが、検索などは司書の方をお願いしたいという気持ちがあります（笑）。

調べごとをしたいが時間のとれない方や、また、調べてみたが思うような情報が得られなかった方、いろんな事情で検索ができない方には、司書の方が代わってこれまで通り検索をしてほしいと思います。また、検索をすれば文献も手に入れたい。その要求にも迅速に対応していただきたいと思います。

森川：その他、特に私たち図書館員や司書に対して望まれることはありませんか。

牧野：やはり司書の皆さんにお願いしたいことは、電子化された情報もしかりですが、私たち医師といっても、すべての論文に目を通すことなど不可能です。したがって、例えば、“新しくこんな雑誌が創刊されましたよ”とか“この雑誌はこういう傾向の論文が多いですよ”。などといった資料についても、どんどんガイダンスしていただければたいへん助かります。

### ●理想を言えば医療情報部構想

森川：いろいろと貴重なご意見をありがとうございます。図書室も、情報の電子化を始めとした環境の変化を受けてここまで発展することができたのですが、今後の図書室像について、先生のお考えをお聞かせください。

牧野：理想を言えばですが、これまでの図書・文献サービス部門と、病歴といわれる部門、これに加えて、その病院の医療内容の統計分析、学会への発表の支援や、病院の業績集などの編集・発行機能などを統合する部署が求められてくるのではないかと考えていま

す。司書の方や診療情報管理士の方などを含むチームを編成して、医療の質を維持し発展させられるような部署が必要なのではないのでしょうか。

前田：現在、医療情報といえば、オーダリングシステムなどのコンピュータの情報システム構築にそのような名称をつけているところが多いようですが、先生のお考えになっている医療情報は、これとは違うものなんですね。

牧野：確かにそれも医療情報と言えないことはないのですが、私の考える医療情報は、病歴や図書・文献管理を含んだもので、それにプラスアルファされた日常診療や研究活動に具体的に役立つものでなければならぬと思っています。

例えば、「胃癌患者における術後の生存率を全国的なデータと当院のデータを比較分析をして提供する」などといったもので、もっと臨床に近い情報として日常の診療に役立ち、研究支援的な部署として発展できればと考えています。

### ●会誌「病院図書室」を発行して

森川：協議会では会誌「病院図書室」を発行しています。会員に送付するほかにも、購読会員の方が約70名近くいます。少しでも、病院図書室のレベルを向上させることができればと努力しているのですが、会誌を読まれてのご感想などあればお聞かせください。

牧野：病院図書室が現在かかえている問題点や話題などが取り上げられていて、私もとても参考になります。特に、啓蒙という側面も果たしていると思いますので、編集業務はたいへんだと思いますが、あまり背伸びをせずに着実に内容を深めていくことが、必要だと感じています。今でも、それなりのレベルを維持されているのではないのでしょうか。必ず‘継続は力’となります。これからも、たいへんでしょうが、ぜひ頑張ってください。

それと、図書館員の方だけではなく、院内

でも、回覧をなさって、多くの方に理解してもらおうようになさっても良いと思います。病院図書室の現状や課題などを広くアピールするひとつの手段となるのではないのでしょうか。

●今後の協議会活動について

森川：最後になりますが、今後の協議会活動について何かご意見をお聞かせください。

牧野：そうですね。まだまだ、超えなければならぬハードルは多いとは思いますが、これまでの蓄積に確信をもって確実に進んでいくことが大切なのかと思います。

ひとつは、今以上のレベルへと病院図書室をステップアップさせることでしょうか。これまでもお話ししてきましたが、教育ガイダンス的機能などを含んだ新たな機能の追求、ひとつ上のステップに踏み込んでいくことが必要かと思います。その一方で、病院図書室間

のレベルの均一化もはかっていくことも必要でしょう。図書室間に機能の格差があると、組織としての運営や、病院図書室全体の発展にもどうしても支障がでてきます。

確かに難しい課題でもありますが、私も微力ですが協力させていただきますので、一步一步、確実に前進させていくことが大切だと感じています。

森川：今日は、長時間にわたり、いろいろと貴重なご意見をお聞かせいただきまして本当にありがとうございました。

今後ともよろしく願いいたします。

(1998.12.8 兵庫県立尼崎病院)

協力：浜口恵子 (編集部)  
堀江亜由美 (編集部)